

# 無床助産所実習での学生指導における臨地指導助産師の経験

安積陽子<sup>1\*</sup>、高田昌代<sup>2</sup>、子安恵子<sup>2</sup>、谷川裕子<sup>2</sup>、  
早瀬麻子<sup>2</sup>、藤井ひろみ<sup>2</sup>、嶋澤恭子<sup>2</sup>、渡邊定博<sup>2</sup>、吉岡隆之<sup>2</sup>

<sup>1\*</sup>甲南女子大学、<sup>2</sup>神戸市看護大学

キーワード：助産学実習、無床助産所、学生指導、臨地指導助産師、経験

## Teaching Experiences of Independent Midwife Practitioners of “Mushou josanjo” in Midwifery Practicum.

Yoko ASAKA<sup>1\*</sup>、Masayo TAKADA<sup>2</sup>、Keiko KOYASU<sup>2</sup>、Yuko TANIGAWA<sup>2</sup>、  
Mako HAYASE<sup>2</sup>、Hiromi FUJII<sup>2</sup>、Kyoko SHIMAZAWA<sup>2</sup>、Sadahiro WATANABE<sup>2</sup>、  
Takayuki YOSHIOKA<sup>2</sup>

<sup>1\*</sup>Konan Women's University <sup>2</sup>Kobe City College of Nursing

Key words : Midwifery practicum, “Mushou Josanjo”, Instruct midwifery students, Independent midwife Practitioners, Teaching experiences

### I はじめに

神戸市看護大学助産学専攻科（以下、本専攻科）は、4年制大学を卒業した看護学生を対象とした1年課程の助産師教育機関として平成17年に開設された。その教育のねらいは、周産期を中心としたライフサイクル全般にある女性、乳幼児、家族そして地域社会を対象に人間性を重視したケア・支援を行う専門職を育成することにある。カリキュラムの中でも重視している助産学実習の目的は、妊娠期から育児期における女性やその家族に対して、正常分娩を中心とした助産を、根拠に基づき系統的に実践するための知識・技術を統合し、助産師に必要な態度を習得することにある。

助産学実習の目的を達成するためには、マタニティサイクル各期を通して母子とその家族への支援が助産師の裁量で実践されている助産所で学ぶことが望ましい。その理由は、助産所では妊娠期から産褥期・育児期にいたる継続的なケアが行われている、地域密着型の継続ケアの必要性についての開業助産師の認識は病院等の施設に勤務する助産師に比して高い（村上ら、2002a；村上ら、2002b；村上ら、2003）、ことがある。

こうした理由から、助産学実習では病院実習とともに

に助産所実習も行っている。特に無床助産所実習は、本専攻科の教育のねらいでもある、地域社会を対象に人間性を重視したケア・支援を行う専門職を育成する上で重要であり、特徴の一つでもある。

無床助産所は、「入所設備をもたず、助産師の自宅を拠点（事業所）として、妊産婦の自宅に出張して分娩を取り扱う、または分娩は取り扱わず保健指導のみを行うことによりその業務を実施するものをいう」と定義されている（日本看護協会監修、2008）。

出張を基本としてその業務を遂行するには、多様な場所や環境で、的確に相手の状況を見極め、場に応じたケアを提供する技術が求められる。そのため、無床助産所実習で、助産師学生は、経験豊かな助産師の場に応じた助産実践に触れることができる。

このように無床助産所は、出張を基盤としてケア提供する特徴があるため、実習においても助産師学生（以下、学生とする）の学びや、指導者である助産師（以下、臨地指導助産師とする）それぞれに、実習環境の特徴に応じた経験があるのではないかと推察される。しかし、無床助産所実習を取り入れている教育実践の報告は見当たらない。また、助産学実習における指導者の経験に関する先行研究は、分娩介助の学習に

関するものがほとんどであり（菱沼，2008；谷津，2003；古田，2004），助産所実習に関する先行研究は，有床助産所における教員の学生指導に関するものに限られている（寺尾ら，2001）。

以上のことから，無床助産所実習が助産師学生にどのような学びをもたらし，臨地指導助産師がどのような経験をしているのか明らかにする必要がある。現在，無床助産所における学生の学びを明らかにすることを目的に研究を行っている。同時に臨地指導助産師の経験を明らかにすることによって，学生と指導者双方にとってよりよい学びの環境を整えるための示唆が得られると考えられる。

## II 研究目的

本研究は，無床助産所での実習指導における臨地指導助産師の経験を明らかにすることを目的とする。

## III 研究方法

### 1. 研究協力者

無床助産所の所長で，本専攻科における助産学実習に協力している臨地指導助産師。

### 2. 無床助産所実習の概要

助産学実習は，前期実習7週間，後期実習7週間の合計14週間である。病院実習と並行して有床助産所で5週間程度，無床助産所で5日間の実習を行う。無床助産所実習の目標は，無床助産所助産師の役割を理解すること，助産師活動の実際を通じて，地域における母子ならびにその家族のニーズを理解することである。1か所の無床助産所で実習する学生数は2～3名である。学生には，無床助産所における活動をできるだけ多く経験するように説明し，助産所実習の日程調整や実習内容は学生が主体的に行うように指導している。大学教員は，臨地指導助産師に対して，年度毎に無床助産所への実習依頼と実習終了後学生の評価を聞くことが主な役割であり，必要時相互に連絡を取るようになっている。

### 3. 調査期間

平成21年3月～平成21年5月

### 4. データ収集および分析方法

データ収集方法は，半構成的面接法である。面接内容は，研究協力者の学生への実習指導における経験内容とした。取り上げられた内容に関して，その状況を詳しく尋ね，経験に対する意味付けを明らかにするように努めた。面接の内容は，研究協力者の承諾を得た後ICレコーダーに録音した。

面接終了後，直ちに面接内容を逐語録におこし，その後録音内容と逐語録が一致していることを確認しデータとした。逐語録を数回読み返し，データが示す意味の把握に努めた。次に，データを段落ごとに読み進め，意味のまとまりごとにコードを抽出し，さらにコードを意味の類似性に基づいて分析しカテゴリー化を行った。

質的研究法では，データ分析における研究者自身の能力や研究者のもつバイアスが分析結果に大きく影響する。そこで，データ収集・分析の信頼性・妥当性を高めるために，以下のことを行った；①インタビューは，現在本専攻科の教育には携わっていないが，教育目的，方法などを理解している助産師が行う，②分析は，助産師経験5年以上の助産学領域の研究者8名と開業助産師の役割および本専攻科の助産学実習を理解している他領域の研究者2名で行う。

### 5. 倫理的配慮

この研究を実施する上で，特に倫理的配慮が必要である点として，無床助産所実習の評価につながることで，大学名が特定されているため比較的実習施設が特定されやすいこと，が考えられた。そこで，インタビュアーは，無床助産所実習に携わっていないが，研究協力者となる助産師との関係作りができていた助産師とした。協力実習施設が特定されやすいことを踏まえ，プライバシー保護のため，得られたデータは無記名で処理した。研究概要，ならびに以上の具体的な倫理的に配慮する点について，研究協力者に文書と口頭で説明し同意を得た。本研究は，神戸市看護大学倫理委員会の承認を得て実施した。

## IV 結果

### 1. 研究協力者

臨地指導助産師の役割をとる助産師全員から，研究協力を得られた。研究協力者は7名で，平均年齢は

45.8歳で、平均助産師歴は23年であった。全員が助産師免許取得後、病院勤務を経て独立開業していた。研究協力者の中には、大学での看護教育経験者や本専攻科で非常勤講師として講義の一部を担当するものもいた。6名の研究協力者は開学年次から、1名は開学2年目から当該実習指導に携わっていた。

データから明らかとなった無床助産所実習における実習内容は、新生児訪問、マザークラスや両親学級、子育てサロンの開催などの育児支援、自治体や会社が主催している赤ちゃん教室、性教育（小学校・中学校）の事前打ち合わせ、性教育の授業、ファミリーサポート事業の研修会、産科クリニックでの保健指導を見学したり、一部の援助を担当することであった。

## 2. 無床助産所実習における臨地指導助産師の経験

データ分析の結果、無床助産所実習における臨地指導助産師の経験として、【同じ志をもつ後輩を大切に】、【指導をチャンスと捉え大学と共に育てる】、【活動・業務範囲内で可能かつ最良の実習内容を計画する】、【地域での支援をよりよく経験できるように働きかける】、【地域に根付いた助産師特有の助産観を伝える】の5つのカテゴリーが抽出された（表1に示す）。以下、カテゴリーは【 】で、サブカテゴリーは[ ]、研究対象者の語りは「 」で記す。また、対象者の語りの部分で文脈を説明するために（ ）内に注釈を加えた。

表1 臨地指導助産師の学生指導における経験

カテゴリー	サブカテゴリー
同じ志をもつ後輩を大切に	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学生に期待する</li> <li>・学生の自主性を尊重する</li> </ul>
指導をチャンスと捉え大学と共に育てる	<ul style="list-style-type: none"> <li>・助産学実習の1つとして位置付けられたことの評価に応える</li> <li>・育てる一員として学生に関わる</li> </ul>
活動・業務範囲内で可能かつ最良の実習内容を計画する	<ul style="list-style-type: none"> <li>・体験させたい実習と実現可能な実習との間で悩みながら実習機会を提供する</li> <li>・業務の調整、事前の連絡によって実習環境を整える</li> <li>・実習調整の煩雑さを感じる</li> </ul>
地域での支援をよりよく経験できるように働きかける	<ul style="list-style-type: none"> <li>・活動地域を活用して場に溶け込むための環境を作る</li> <li>・見学させるか、実施させるか、場面ごとに判断する</li> <li>・経験した内容の振り返りをする</li> </ul>
地域に根付いた助産師特有の助産観を伝える	<ul style="list-style-type: none"> <li>・地域で生活している母子のニーズ</li> <li>・地域の一員としての助産師の生活</li> <li>・実践活動に対する充実</li> </ul>

### 【同じ志をもつ後輩を大切に】

このカテゴリーは、臨地指導助産師は、助産師学生に対して同じ道を志す1人の人間として敬意をもって

接していたことを示している。このカテゴリーには、[学生に期待する]、[学生の自主性を尊重する]の2つのサブカテゴリーが含まれていた。

[学生に期待する]は、助産の道を志向しようとしている一人の人間に対して先輩として応援しようとする姿勢で接していることを指す。これは、今後の臨床実践をよりよいものに変革できる人材であるという学生への期待が含まれていた。また、各学生の経歴や背景を知った上で、助産師としての態度を養ってゆけるように個々人に応じた関わりをしていた。

「自分の将来を決める18歳の時に看護というものをまず選ばうと思ってくださることにすごく敬意を払って、その中で助産に興味を持ってきて助産をやってみようと思う方はさらに敬意を払うので、『頑張ってるね』という感じです」

「彼女がその勤務経験を無駄にはしていない、保健師としては無駄にはしていないところなんだけど、少しその視点を変えられたほうがいいかなというところがあったので、それはご本人に『ここはすごくいいんだけど、もしかしら時には忘れたほうがいいかもしれないね』というようなことは言ったことがある」

[学生の自主性を尊重する]は、実習期間を有意義にするために個々の学生の実習目標や経験したいと考えている実習内容、他の実習との兼ね合いを考慮して実習調整を行うことであった。

「私が予定を言うと、『じゃあこの日に行きます』と言って選んでくれたりしています」

### 【指導をチャンスと捉え大学と共に育てる】

このカテゴリーは、臨地指導助産師が無床助産所実習をカリキュラムに組み込むという大学の教育方針を理解し、大学教員との信頼関係がある上で実習指導に取り組んでいることを示している。[助産学実習の1つとして位置付けられたことの評価に応える]、[育てる一員として学生に関わる]の2つのサブカテゴリーが含まれていた。

[助産学実習の1つとして位置付けられたことの評価に応える]は、大学教員が無床助産所の助産活動に価値を置いていることを示すことで臨地指導助産師と助産観が共有されたことを示している。その上で研究協力者は、開業助産師としての活動が、伝える価値のある重要な内容であることを再確認していた。さらに、実習を受けることが地域における助産活動の重要性を学生に伝える良い機会であると捉えていた。

「自分が有床の病院にいた時は実習を受けて、教えていたんですけども、その時教えていたことと自分がフリーで地域で開業して働いてからとでは、やっぱり自分の経験も違ふし、助産師としての仕事の幅もずいぶん変わっていったので、自分が病棟にいた時に気がつかなかった視点を助産師も持たないといけないというのは、すごく自分が感じていたんですね。(略)だから、『(助産学実習を)有床(助産所)じゃない人にやってほしい』と言われた時はすごく嬉しかった。最初は病院や助産院で働くにしても、自分が気づいている活動をぜひ知っていてほしい、体験してほしい、ということをお伝えられたらなと思いました」

〔育てる一員として学生に関わる〕は、助産学実習の内容を十分に理解し、実習全体の構成の中の一部を担い、担当範囲を明確にしながらかつ実習指導していることである。

「赤ちゃんの抱き方が雑だった学生、どこでそんな抱き方を学んだんだろうと思ったが、注意をして直った」

「実習内容でいくと、お産を体験してもらってというのは、夜中だったり、〇〇(地域名)から来られるっていうのはまず不可能に近いというがあるので、なかなか難しいんです。(略)私の中では、有床の助産院でケースを持ってやっつけられるからそういうの(分娩実習)はそこでされたらいいかなあっていうのがある」

【活動・業務範囲内で可能かつ最良の実習内容を計画する】

このカテゴリーは、自らの助産活動の何を経験してもらえばよいのか自問し、時にはジレンマを抱えながら実習内容を計画し、実習環境を提供することである。このカテゴリーには、〔体験させたい実習と実現可能な実習との間で悩みながら実習機会を提供する〕、〔業務の調整、事前の連絡によって実習環境を整える〕、〔実習調整の煩雑さを感じる〕の3つのサブカテゴリーが含まれていた。

〔体験させたい実習と実現可能な実習との間で悩みながら実習機会を提供する〕は、地域での助産師の活動や地域で生活している母子の状況をよりよく理解するために、どの場面に同行させるか検討することである。その過程では、限られた実習期間で活動の全容を実習させられないジレンマを感じたり、悩んだりしていた。

「これも、あれも、こんなことまでしてますよってということを見てほしいんです。けれども、そうすると一つに対してが浅くなるところが、ちょっとジレンマっていうんですか」

「(母子訪問の実習では)でも、実際に段取りしているところ

ろは見えてないです。電話のかけ方とかそこら辺からすごい大事だと思うんですけど(実際は実習の機会を提供できない)」

「おっぱいケアは乳腺炎とか今張って痛いからすぐ行くとかなので、なかなか事前に学生が来るからこの人というわけにはいかないんです」

〔業務の調整、事前の連絡によって実習環境を整える〕は、学生の実習日には母子訪問、各種教室などの時間や場所を調整し、実習の同意を事前に得て、実習の機会を確保することであった。これは、母子へのケアと学生の学びの促し、という両方の側面を配慮して実施されていた。事前に母子に同意を得たり、実際にケアをして母子の状況を把握した状態で学生実習をさせるようにしていた。また、学生の実習内容が深まるように、実習日は、振り返りの時間を作るために、業務量を減らしていた。

「『学生を2人連れて行きますけど、大丈夫ですか?』とアポイントを取る時には言ってから行くようにしています。助産師学生で助産師の卵なんですと言うと、大体はいいと言ってくれます」

「(母子訪問は)初めての人の所にはあまり行ってなかったんですね。やっぱり初めての人の訪問は、お母さんも緊張するだろうし、私も初めてお母さんの問題点とかを知るので、それを分かった人の所に訪問したほうがいいなと思っているんです。だから、訪問する人は最低1回行って、自分も知っていて理解していて了解を得たという方に行くようにしました」

「家庭訪問にしても1日4軒、5軒行けるところを、学生さんが行く時には2軒、3軒に減らして、学生さんが回れるような時間だったり、後の反省会ができる時間をとりたいなと思っている」

「(学生が短時間で母子訪問に回れるように)訪問は取っておいて、その日(実習日)に組めるように事前にその地域の人を集めておくわけです」

〔実習調整の煩雑さを感じる〕は、仕事を受けた開業助産師と学生実習を担当する指導者の両方の立場から、関連職種に、実習に関する連絡・調整を実施することの煩雑さや、学生の実習が充実するように仕事を獲得することなどが含まれる。

学生を同行させるすべての場所の関連職種に事前に連絡し了解を得ることは、臨地指導助産師の業務を煩雑にさせていた。

「赤ちゃん本舗へ連れて行った時に、ちょっと本部の人にひと声掛けておいたらよかったんだけど、私より彼女たちがちょっとだけ早く来てしまって先に行ってしまって、(略)。あとで同僚の助産師さんに「ちょっとこれは困るわ」と怒られたんだけど、(略)ひとこと言わなかったことが問題になったので、今年からは心を入れ替えて頑張ります」

時期によっては、業務量が少ない時期もあるため、実習の機会をうまく作り出すことに対して困難さを感じていた。

「自分でそれを編み出して実習させるっていうのも結構大変だし、そう出し物はないからネタ切れみたいになってきますからね」

**【地域での支援をよりよく経験できるように働きかける】**

臨地指導助産師は、学生が各実習環境において、スムーズに場に溶け込み、より良い経験ができるようにサポートし、対象理解や援助の視点が広がるような指導をしていた。このカテゴリーには、「活動地域を活用して場に溶け込むための環境を作る」、「見学させるか、実施させるか、場面ごとに判断する」、「経験した内容の振り返りをする」の3つのサブカテゴリーが含まれていた。

「活動地域をうまく活用して場に溶け込むための環境を作る」は、その時々で異なる実習の場に学生が溶け込むことができるように、開催している子育てサロンの参加者に協力を積極的に求めるなど、自分の活動地域をうまく活用することである。

「(研究協力者が企画運営している子育てサロンに参加した母親と)ただ一緒にいるだけじゃなくて、なかなか言葉かけの仕方なんかもバツと溶け込めないだろうと思うので、お母さんたちにも『ちょっと手伝って』みたいな感じでお願いします」

「いろんな学生さんがいるので、すごくよく気がつく子とか、もうちょっとという子もいなくはないですが、病院にいるみたいな緊張はしてもらわなくても大丈夫なので、リラックスするようにもっていています」

「見学させるか、実施させるか、場面ごとに判断する」は、実際の実習で何をどこまで経験させることができるか、その場面ごとに判断して学生に関わることであった。臨地指導助産師は、学生に対して見学だけではなく積極的に支援の場に入り、対象者に援助的関わりを持ってほしいと考えていた。しかし、そうした

課題は学生にはハードルが高いため、どこまで経験させることができるか探っていた。具体的には、実習記録を参考にして、次の実習ではどこまで実施が可能か検討していた。また、実際に機会を与えた際には、学生とケアの受け手の双方の様子を注意深く観察しながら、必要時にはその場の雰囲気が壊れないように援助を行っていた。

「まずは見学をしてもらって、学んだことを記録として出してもらった時に、大体は(学生のことが)分かるようになってきたかなあ。だから、最初の記録はできるだけ早い目にほしいなあと思っている(略)、学生さんも実習の兼ね合いがあるので、無理には言いにくいんですね。その辺で大体予測を立てて、「もうちょっとここまでしてみない?」っていうことを、言えたり言えなかったりしています」

「新生児訪問の時の場合は、初回は私がやって次からは任せるときがあるんですが、(略)二人でいらっしゃるから、あなたは記録、あなたは計測や反射を見るとか(略)、というふうになっているんです。(略)例えば股関節を見てないな、その見方はうん?って思う時は、「私にも見せてください」という感じでやるんです」

「新生児訪問に行った時のお母さんたちへの保健指導の内容も、全部が全部お任せしない時もあるんですけど、半分くらいは学生にしてもらって、(臨地指導助産師は)黙って聞かせてもらって、「お母さんそうですよね」みたいな感じで参加して行って、私がちょっと訂正する時はあるけれど、ほめながらいくので、それはたぶん学生は気がついてるかもしれないけど、お母さんにはそんなに響いてないんじゃないかなと思います」

「経験した内容の振り返りをする」は、実習後に学生との話し合いの時間をもち、気づきが深まるような問いかけや、臨地指導助産師が実施したケアの根拠を説明する関わりであった。

「例えば、訪問した家が足の踏み場もないくらい汚かったとか、そういうことを感想で言ってくれたりするので、だったらどうということが考えられるかなとか(略)。そういう感想を言ってもらいながら深めていけるかなと思う」

「家庭訪問では訪問の後に(助産学生に)説明をするんでね。『お母さんはこういう判断をしたから、その判断を支援するというつもりでミルクを足すことを拒否しなかった、否定しなかった』というようなことも言う」

**【地域に根付いた助産師特有の助産観を伝える】**

このカテゴリーは、地域での助産師の在り方を再確認し、学生に伝えた臨地指導助産師の助産観であった。

その助産観は、[地域で生活している母子のニーズ]、[地域の一員としての助産師の生活]、[実践活動に対する充実]の3つのサブカテゴリーに分けられた。

[地域で生活している母子のニーズ]は、退院後の母子がどのように生活しているのか、病院での指導内容が退院後にどのように生かされているのか、あるいは生かされていないのか等、病院実習では理解しきれない継続的な視点を持つことの重要性であった。

「退院後お母さんたちはどういう生活をしてらっしゃるのか。そこは多分病院とみなさんが予想されていることとは大きな違いがあると思うし、(略)そういうところが明らかになるように(略)関わろうとはしていた」

「これから病院に入って(就職して)、ちょっとあのお母さん気になるなというケースってきくとあると思うので、それが今後どのようになっていくかというのを継続して見れるのかな」

[地域の一員としての助産師の生活]は、独立開業で活動を続ける助産師の姿勢であった。それらは、地域をよく知ること、常に他職種とよい連携をとっておくことなど具体的な内容であった。

「母子訪問は地域のことを知っているとか、自分が情報をつかんでいないと教えてあげられないから、引き出しをたくさん持っていることは大切だよいつも言う」

[実践活動に対する充実]は、助産師の活動場所は多岐に渡り、周囲が認めれば様々な活動の仕方助産師として生きていくことが可能であるという、助産師としての自信、仕事の楽しさであった。

「私たちが本当に楽しく仕事をして、お母さんたちが私たちの訪問を待っていて下さっている」

「働く場所が自分の気持ちさえあればあるというのは、安心だと思うんです。ただ助産するだけではなくて、帰ったお母さんをフォローする仕事とか、そういうのもいっぱいあるんです。華々しく病院でお産をとって介助するだけが助産の仕事だけじゃないと思うんです」

「私も出産・育児で休んでいたけれども、病院を辞めても働く場所は次々いくらでもあるということをいつも言うんです。病院に勤めるだけでは制約もたくさんあるけれど、自分のスタンスで働いていくことができます」

## V 考察

### 1. 無床助産所実習における臨地指導助産師の経験

無床助産所実習における臨地指導助産師は、【活動・業務範囲内で可能かつ最良の実習内容を計画する】のカテゴリーが示すように、地域での助産師の活動や母子の状況の理解を深めるために実習内容を計画していた。これは、[体験させたい実習と実現可能な実習との間で悩みながら実習の機会を提供する]のように、可能な実習と体験させたい実習との間で悩みながらも、どのような実習が提供できるのか、自分の活動地域、活動内容の範囲の中で、実習場所を検討することである。また、無床助産所の所長として関連機関やケア対象者と調整し、前もって業務量を調整して[業務の調整、事前の連絡によって実習環境を整える]行為でもあった。

具体的な業務の調整には、1日で有効に同行場面を経験できるように、また実習後の振り返りの時間を確保するために、業務量や活動地域をコントロールすることが含まれていた。この調整は【同じ志をもつ後輩を大切にする】にあるように、ある程度の計画を準備した上で、学生の自主性を尊重し、なるべく学生の希望に沿うように行われていた。

病棟での臨地実習指導者が指導経験において困難であると感じる内容に、指導者への支援体制の不足があり、指導者が兼務となる場合学生にゆっくり指導できないという指摘がある(泊ら, 2010)。本研究における臨地指導助産師は、[業務の調整、事前の連絡によって実習環境を整える]に示されたように、学生指導が十分に行えるようにその日の業務量を減らし活動内容をコントロールするといった調整を独自の判断で行っており、独立開業である自律性が発揮された実習調整が行われていた。これは無床助産所実習の臨地指導助産師の経験の一つの特徴であると考えられる。

しかし、実際に実習場面を提供する作業は、関連職種への説明と理解を求めること、ケアの受け手になる母子への事前の同意を得ること等、煩雑な作業でもある。学生実習に合わせて業務量を調整し、訪問数を減らすといった調整が、それぞれの臨地指導助産師への負担にならないように、臨地指導助産師との密な連携をとることが、実習の継続には必要である。

臨地指導助産師は、実習指導を通して【地域での支援をよりよく経験できるように働きかけ(る)】、

【地域に根付いた助産師特有の助産観を伝え（る）】  
 ていた。これは、地域をよく知ることを意図した実習指導を行うとともに、自らの助産観を学生に伝えていたということである。これらの助産観は、地域で母子がどのような生活をしているのか、入院中のケアが退院後の母子にどう影響しているのか、施設で助産師の行ったケアあるいは行わなかったケアの評価が地域で見えてくる、という継続的に母子を支援する姿勢と専門職として地域で生活することの重要性であった。こうした助産師として母子を支援することの責任が、臨地指導助産師の指導を通して学生に伝えられていたと考えられる。

新人助産師は、臨床現場に活かされた助産師教育課程での学びとして、産婦や助産師との関わりの中で学んだ助産師の責任をあげている（中島ら、2009）。本実習では、臨地指導助産師は意図的に自らの助産観を伝えていた。助産観は、ケア提供の判断基準となるような、個々の助産師の信念や行為に基づいた生活や現実に対する態度であり、個々の助産ケアの質を決定するものである（今関ら、2002）。助産ケアの質を左右する信念を言葉や実際の場面を通して伝えてゆくことによって、学生個々の助産師としての責任と態度の育成に影響を与えている可能性がある。これは、助産学実習における実習目的の一つである、助産師に必要な態度を習得するためにも必要である。実際に、こうした目的が達成されているのかどうか、今後、無床助産所実習における学生の学びに関する研究結果も踏まえて検討する必要がある。

## 2. 臨地指導助産師の実習指導への取り組みの姿勢

能動的な実習指導への取り組みには、【指導をチャンスと捉え大学と共に育てる】という臨地指導助産師の助産学実習に対する姿勢があると考えられる。冒頭で述べたように、全国の助産師養成機関で助産所実習は行われているが、有床助産所と無床助産所のそれぞれに実習の機会を提供している養成所の報告は見当たらない。したがって、本研究協力者の臨地指導助産師も、無床助産所の助産師として実習指導の依頼を受ける経験はほとんどなかったと考えられる。そのため、無床助産所の開業助産師に対して大学から実習依頼があったということは、自分たちが行ってきた地域に根差した助産師活動に対する社会的評価と解釈している。さらに、この機会は、自らの仕事の重要性を再認識す

る機会になったと考えられる。このことから、無床助産所助産師は、学生指導時に助産観を伝える良いチャンスだと捉え、そのために実習環境を積極的に整えるという能動的な実習指導が可能となったと考えられる。

## 3. 研究の限界

本研究の限界は、研究協力者が、本専攻科の無床助産所実習の臨地指導者に限られていることであり、一般化することは難しいことにある。今後、他助産師養成所において同様の実習が展開され、指導助産師の経験が明らかになることで、無床助産所実習に関する指導者の経験に関する知見が蓄積されることが望まれる。今後の課題は、無床助産所実習における学生の学びを整理し、臨地指導助産師の実習指導における経験が、学生の学びにどう活かされているかを明らかにし、よりよい学びの環境を整える基礎データを得ることである。

## まとめ

無床助産所実習における臨地指導助産師の経験は、【同じ志をもつ後輩を大切にする】、【指導をチャンスと捉え大学と共に育てる】、【活動・業務範囲内で可能かつ最良の実習内容を計画する】、【地域での支援をよりよく経験できるように働きかける】、【地域に根付いた助産師特有の助産観を伝える】の5つのカテゴリーに分類された。臨地指導助産師は、可能な実習と体験させたい実習との間で悩みながらも、実習を展開するために業務を調整し、実習環境を確保していた。具体的な業務の調整は、学生の自主性を尊重しながら行われていた。また、臨地指導助産師が実習を通して伝えていることは、地域で継続したケアを行う意味と重要性であった。このような具体的な実習調整や指導は、助産学実習の位置づけとして無床助産所実習が必要であるという大学との共通認識のもとに行われていた。

## 謝辞

本研究にご協力いただきました臨地指導助産師の皆さまにお礼申し上げます。

本研究は、神戸市看護大学共同研究助成の支援を得て、実施した。

## 引用文献

(受付：2010.11.2；受理：2011.2.1)

- 藤岡完治, 屋宣譜美子編集 (2004)：看護教員と臨地  
実習指導者, 医学書院, 東京.
- 菱沼由梨 (2008)：臨床指導者が分娩介助初期の学生  
に期待する学びの構造, 日本助産学会誌, 22(2)：  
146-157.
- 村上明美, 平澤美恵子, 滝沢美津子, 他 (2002a)：  
「日本の助産婦が持つべき実践能力と責任範囲」に  
関する助産婦の認識(上)「妊娠期のケアとその責任  
範囲」「分娩期のケアとその責任範囲」に関する認  
識の実態, 助産婦雑誌, 56(10)：844-850.
- 村上明美, 平澤美恵子, 滝沢美津子, 他 (2002b)：  
「日本の助産婦が持つべき実践能力と責任範囲」に  
関する助産婦の認識(中)「産褥期の母子のケアとそ  
の責任範囲」「家族ケアとその責任範囲」「地域母子  
保健におけるケアとその責任範囲」に関する認識の  
実態, 助産婦雑誌, 56(12)：1030-1036.
- 村上明美, 平澤美恵子, 滝沢美津子, 他 (2003)：「日  
本の助産婦が持つべき実践能力と責任範囲」に関す  
る助産婦の認識(下)「女性のケアとその責任範囲」  
「専門職としての自律を保つための行動と責任」に  
関する認識の実態, 助産雑誌, 57(2)：161-168.
- 日本看護協会監修 (2008)：新版 助産師業務要覧  
増補版, 会出版会, 東京.
- 寺尾明子, 日隈ふみ子, 柳吉桂子 (2001)：助産院継  
続実習における学生と教員の関わり, 京都大学医療  
技術短期大学部紀要, 21：49-61.
- 常盤洋子, 今関節子 (2002)：4年制大学における分  
娩介助実習の効果的な教授法の検討-実習状況及び  
実習到達度の分析から, 助産婦雑誌, 56(6)：507-  
513.
- 泊祐子, 栗田孝子, 田中克子 (2010)：臨地実習指導  
者の指導経験による“指導の捉え方”の変化と必要  
な支援の検討, 岐阜県立看護大学紀要, 10(2)：51-  
57.
- 古田祐子 (2004)：分娩介助技術指導において助産師  
学生に「わかった」と認識させる指導者の言動的教育  
技法, 母性衛生, 45(2)：342-352.
- 谷津裕子 (2003)：分娩介助場面における助産師学生  
の熟練助産師からの学び, 日本助産学会誌, 16(2)：  
46-55.